

被害妄想とダニ恐怖症への対応

(株)ベストマネジメントラボ 代表取締役 高岡 正敏

要 約

虫に対する被害妄想やダニ恐怖症が近年とみに増加しているようである。しかしその実体は不明な点が多く、関係機関はその対応について苦慮しているのが現状である。

そこで、以下の視点について私見を交えて論じてみた。

1. 虫に対する被害妄想とダニ恐怖症はどうして発生するのか。
2. その背景にあるものは何か。
3. その引き金になる要因として虫の実害が関与しているのではないか。
4. それらの問題点と対応について

今後、この問題はさらに増加していく事が予想されるが、その要因として現在の時代背景が大きく関わっているように思われる。

はじめに

虫の苦情が多数寄せられる中で、典型的な皮膚炎症状もなく、また虫の被害に対して多分に不確実性が認められるケースに出会うことも多々経験する。このような相談を受けた多くのケースで、それらの事例に対して深く関わらないような対応を行ってしまう事が多い。

この種の相談に当たっては、私は相談者の話の印象による先入観をなるべく捨てるよう心掛けている。相談を受ける側は相談者に対して誠意を持って対応しなければ重要な情報を相談者から聞き出すことは困難である。忌避感情を含んだ対応を行っている限り、被害の核心に迫ることは不可能で、原因究明にまで行き着くことは難しい。

これらの相談の中には、現在虫の被害に襲われているものもあれば、過去に虫の被害に襲われていて、その後被害意識を持ち続けているような例も見受けられる。いずれにして

も、私たちはあくまでダニや虫等の被害に対して真摯に向き合い、原因究明を前提に事に当たらねばならない。

その対応に当たっては、被害者に対して検査の目的を明示し、対策の限界を明確に説明して、被害者に納得してもらうことが重要なポイントとなる。いずれにしても私たちはこの問題の一部に関われるだけで、専門はあくまで有害生物の対応から踏み外さないように心掛けることである。

私は被害妄想と思われる問題に接するとき、以上述べてきたことを特に自覚しながら被害者に対応することになっている。

1. 虫に対する被害妄想とダニ恐怖症について

原因不明の虫の悩みに遭遇した時、ヒトは少なからず不安な心理状況に陥る。人によっては一人で悩み続けた挙句、関係機関に相談することになるが、それらの対応や状況によっ

てはより深い恐怖へと陥ってしまう事にもなる。そのような心理状態に陥った被害者から相談を受けた対応者は、意味不明の説明を受けることになる。その際、多くの受け手側は苦情者の話に対して、時間を掛けて聞くことを避けてしまうことが多い。このようなことが日本のあらゆる地域で日常茶飯事に行われていると思われる。このようなことが繰り返されると、被害者はますます負の連鎖に陥って行くことになる。

虫に対する被害妄想及びダニ恐怖症と呼ばれるものは、専門的には皮膚寄生虫症妄想と呼ばれているもので、その実体は不明な点が多い。それらの悩みの対象には様々なものがあるようであるが、特に虫による身体への寄生の訴えが強いと言われている。中でもダニに対しての被害妄想は多いようであるが、その理由として、ダニに対する「イメージの悪さ」や「見えない存在」であることが妄想をさらに増長しているのではないと思われる。このような状態が嵩じてくると、知らないうちにダニや虫に対する恐怖の感情へと移行していくことになる。

この症状を訴える人は、その悩み以外に日常生活は全く普通に暮らし、仕事や食事、その他の生活には何の支障もなくこなしていることが多いようである。しかしそれらの多くは、いざダニや虫のこととなると極めて特異な反応を示し、脅迫観念にも似た感情が表れてくるようである。特に、自分は虫に取り憑かれているのではないかと。さらに自分に取り憑いた虫が他人を汚染させるのではないかとという被害者意識と同時に加害者意識が当事者を追い詰めていくようである。

そのような状態に陥った人たちは、自分の

身の回りを徹底的に整理したり、極度に身体を清潔にするようになり、それが嵩じると自身の身体をも傷つける行為にまで及ぶ事もある。また、殺虫剤などを異常に噴霧したり、過剰なまでの薬剤などの使用による自己治療を行って、時にはその行為そのものが当事者への危害に繋がることにもなりかねない。

2. ダニ・虫の実害から被害妄想へ

虫に対する被害妄想の状態に至るには、必ず何か原因があるはずである。それは虫刺されに端を発する単独的な要因もあれば、被害者の背景にある様々な事情や精神的な悩みなどが積み重なった複合的な要因が恐怖症へと発展していくのではなだろうか。

例えば、住居内で原因不明の皮膚炎が持続し、その悩みを誰にも相談できず、一人悶々と悩んでいる状態が長く続けば、誰もが精神的に追い詰められてしまうのは当然のことである。さらに、生活面での様々なストレスや苦悩がそれに拍車を掛けるようにも思われる。誰ももそのような状態に陥るとは限りらないが、本人の性格や生活事情などの要因が重なって、妄想や恐怖へと至ってしまうのではないかと推察される。

その発端がダニや虫の被害から始まったとしたら、初期の段階での被害者に対する対応や原因究明が大変重要になってくると思われる。このような問題は誰にでも起こりうる可能性があるのである。

私のところに持ち込まれるケースの中には、虫の問題に悩まされたことが引き金になって、ダニに対する被害妄想に陥ったのではないと思われる事例を少なからず経験している。このような事例を過去に遡って聞き取り調査

被害妄想とダニ恐怖症への対応

をしていくと、ダニに対する被害妄想に陥る初期の段階で虫の被害(皮膚炎など)を経験していて、原因も分からず、誰にも相談できず、一人で悩んでいくうちに極度な不安や恐怖へと発展してきた経緯が見えてくるのである。特に、その対象が身近に実在する実体の無いダニや虫などが格好の対象となる。このような構図で虫やダニに対して異常な執着に取り憑かれてしまった人は日本にどれだけ存在し、どのような経過を辿っているのか、ほとんど把握されていない。

3. ダニ恐怖症の原因とその要因について

では、なぜこのような状態にまで陥ってしまうのか？ その機序についてはほとんど解明されていない。その要因として、本人の生活状況の悪化や生活環境の急激な変化、さらに様々なストレスなどが誘引になっているという。また内臓疾患が原因となる場合もあるようであるが、多くの場合本人の生理状態にはほとんど異常は見当たらず、いたって健康体だという。しかし前にも述べたように、このような状態を放置しておく、状況によっては過剰な行為に至ったり、時には体調に異変を生じる危険性もある。

ダニの仕事を長い間続けていると、このような被害妄想に悩まされて生活している人にお会いし話を聞く機会も多く、それらの患者に共通する性格としては温厚で、気がやさしく、几帳面で、礼儀正しく、潔癖性の人が多い。さらに他人に対して人一倍気を遣い、そして節度ある生活を送っている人がその大半を占めている。そのような状況に陥る背景には、個人の性格や個人が抱えている様々な事情が介在していると考えられる。また、妄想者は孤

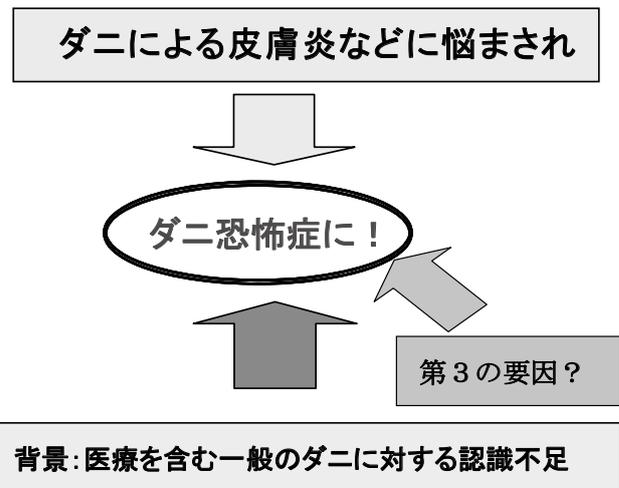


図1 ダニなどによる皮膚炎が引き金になるダニ恐怖症

独な状況に置けている事が多い。さらに重要なのは、図1に示したように、そのような悩みを抱えている被害者に対する周辺の人たちの無関心と医療関係者などの対応者の無理解がこの問題を誘引する大きな要因になっているように思える。

近年、そのような人たちは思いのほか増加しているように思われるが、現在のところ、この問題に対して組織だった取り組みはなされていない。そのため、それらに関する詳細な資料や情報などはほとんどなく、ましてやその解明はなされていない。仕事柄、私のところにも沢山のダニに悩む人からの相談や検査依頼が求められるが、その対応に苦慮しているのが現状である。

4. ダニ恐怖症の問題点とこれからの課題

この問題で今ひとつ注目されるのが、これらの事例の多くは原因が分からないまま医師や業者や個人によって安易な対応がなされていることである。

特に、神経質の人の場合は、虫やダニが発生したとなると、住居内のありとあらゆるところに殺虫剤などの化学物質を大量に撒布し

ていることが多々あるが、この行為が精神に影響をきたす事にもなりかねない。

近年の住宅は気密性が高く、個室の住宅が多いため部屋の空間が狭い構造となっている。このようなところに大量の殺虫剤が撒布されると、常時高濃度の化学物質にさらされることになる。被害者宅を訪れたとき、化学物質の強い臭いが部屋中に充満し息苦しくなった思いをしたことは一度や二度ではない。このような状況の中で、住宅の外に出ることが少ない女性や幼い子供への暴露量は外に出ている人の何倍にもなる。それは虫に刺されよりもっと恐ろしい状況を招くことにもなりかねない。

殺虫剤の原体である有機リン系などやそのほか添加剤や協力剤そして殺虫剤を溶解している有機溶剤などの化学物質が住居内を高濃度に汚染した状況が続くと、それらが居住者の精神や生理に重大な影響を及ぼしていることも大いに懸念される。さらに、このような化学物質の持続的暴露が人の生理に影響することによってアレルギー性疾患の症状悪化を招くことも報告されている。一方精神的な影響として、ダニや虫への被害妄想を誘引していることも可能性が高い。これらの化学物質の何が、どのように人に影響を及ぼしているのか詳細な検討が望まれる。化学物質の人体への影響に関して、近年さまざまな分野から報告がなされているが、日本では以前から指摘されていながら現実にはあまり進展が見られていない。

おわりに

近年、ダニや虫の被害妄想などに悩んでいる人は思いのほか多いにもかかわらず、この問題に関してはほとんど手付かずで放置され

ている状況にある。にもかかわらず、この問題に対して誰が解決の方向に導いてくれるのか、それは誰の役割なのか、それを受け入れる機関は何処なのか、何一つ明確になっていない。

このような状況で、この問題で苦しんでいる人は全国各地に極めて多く存在し、その被害者は増加傾向にあるといえる。まさに現代社会に生きる私たち一人一人が、この問題の被害者になる可能性を孕んでいるのである。現在のところ、このような症例に対応できる専門機関が見当たらないのも、それらの人たちにとって不幸である。

最後にダニ恐怖症に対する対応とその対策の視点についての私見を以下の表1に示した。参考になれば幸いである。

表1 ダニ恐怖症の対応と対策の視点

1. まず、先入観は捨てる。訴え者の立場にたって苦情を聞き対応する。
2. あくまでも、ダニもしくは虫の原因究明を前提として対応する。
3. 医師に相談したか、診断があるか、どのような対応が行なわれたか。
4. 過去の経緯を聞く。最初に問題となったこと、何に対して不安なのか。
5. 事情をよく聞き、発症に到る背景を探る。
6. 原因が存在する場合を想定する。
7. 状況によっては検査・調査を行う(原因の究明)。
8. 調査結果を示し、状況説明を行う。
9. 出すぎた対応をとらない。誠意を持って気長に対応する。
10. 訴え者の精神的な状況を把握し、必要に応じてカウンセリング的な対応も行なう。*状況によっては精神的な治療が必要な場合もある。
11. この問題に対する実態の把握と医療関係、行政の組織的関与が必要。
12. 対策に当たっては、その限界を明確に示し納得してもらおう。

被害妄想とダニ恐怖症への対応

いずれにしても、この分野の早急な対応と対策の確立が望まれるところである。

文 献

厚生省室内空気質健康影響研究会報告(2004) : シックハウス症候群に関する医学的知見の整理

厚生労働省(2010) : 室内空气中化学物質の指針値及び毒性指標

大滝倫子(1991) : 虫恐怖症(寄生虫妄想) 188

例について。衛生動物42 (2) : 188

高岡正敏(1999) : 喘息に関する家庭内吸入性アレルギー(メディカルレビュー社)

高岡正敏(2013) : ダニ病学 : 東海大学出版会

高岡正敏(2009) : 第64回日本衛生動物学会西日本支部大会

鳥居新平(1997) : シックハウス症候群 : 徳間書店

夏秋 優(2009) : 第64回日本衛生動物学会西日本支部例会

